

母親の育児役割意識に関する一考察

—乳幼児の夜泣きと母親に関する研究より—

薄井 孝子

(北海道) 江別市立病院 精神リハビリテーション室

キーワード：夜泣き、母親、育児観、母性「神話」

はじめに：

中田(2002)は、乳幼児の夜泣きと母親に関する調査を行い、育児行動や環境、子どもの特性(神経質等)以外に夜泣きの発生に関与する事柄はないかを検討し、夜泣きの有無と母子の特性との相関性について報告した。そこでは、夜泣きが「有る」母親群は、「無い」母親群よりも対児感情における拮抗指数が高くあり、悩み体験のある母親が多く、特に育った家庭に関する悩みを抱えていた人が多いことが判り、さらに「有る」母親群にのみ Adult Children Of Disfunctional Family が含まれていることを報告した。また、インタビュー等から浮上してきた、母性における「神話」¹⁾と日本の母性観の問題に関しても追究する必要があることを報告した。

今回は、調査において「育児への役割」について質問した集計結果に着目し、母親の育児観と母性の「神話」の存在に関する考察と今後の課題について述べたい。

研究：

<対象>乳幼児による夜泣きは生後から始まり概ね2才頃には終わるとされている。また、本調査においては一般的な*夜泣きの概念を探るため、「現在3才未満の育児に携わる健康な母親」とし、2002年1月～3月にかけて76名の母親に調査を実施した。...*母親や子どもが心身の疾患を抱える場合等は見解を異にする必要があると思われる。

<方法>

半構造化面接法(一部グループ面接法、郵送法を含む)による育児生活調査

結果：

- 1) 図1は「育児への役割」について質問した集計結果である。「女の仕事」と回答した母親は4.5%、「どちらかといえば女の仕事」は66.3%、「男性の仕事として取り入れられるべきだと思う」は21.3%、「その他」が7.9%であった。
- 2) 「女の仕事」、「どちらかといえば女の仕事」の回答を併せると、70.8%の母親が育児を「女の

仕事」として捉えていた。

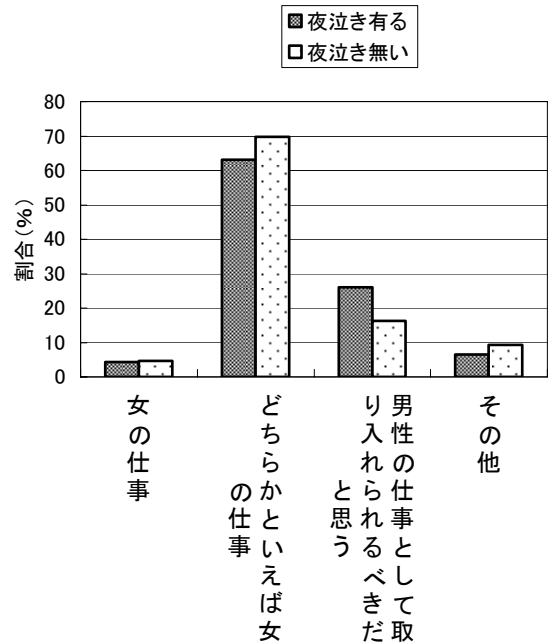


図1 育児への役割感

3) 「その他」の回答では、「育児は夫婦ですもの」が全体の2.6%、「性別には無関係」が2.6%、妊娠・出産をするのは女だから女の仕事」が1.3%、「外の仕事を持っていない側がすること」が1.3%であった。

考察と今後の課題：

育児を「女の仕事である」と言い切る回答をした母親は少なく、おそらく戦後や高度経済成長真っ只中の時期の日本で育児をしていた母親達とは、育児への性別における役割感はかなり異なっているように思われる。

実際に、保育園へ送迎をする男性の姿が非常に多く見られるようになり、街では子供を抱えた父親がスーパーで買い物をする姿なども少なからず見かけられ、一昔前の日本と比較すれば、社会は変動し、日本でも以前より育児に関心を持つ男性

が多くなって来ていることは言えるだろう。

しかし、現代の日本の育児に関する潜在的な問題として、常に社会情勢に敏感な立場に置かれている男性の意識改革ばかりでなく、一般の女性の意識にも着目する必要があると思われる。

「どちらかといえば」を併せると 70.8%もの母親が育児を「女の仕事」として捉えていることは、多くの女性において、未だ育児は自分達の仕事であるという意識が根強いことが示されることであり、そのような意識がある以上、男性は女性から育児という仕事への参加を、心理的には“許された”状態に過ぎないだろう。

男性の育児参加を強く望むのであれば、女性側の意識改革にも能動的に取り組む必要があるように思われる。

例えば、夜泣きへの対処が比較的詳しく記載された、ある育児相談のホームページで、夜泣きについて「外国では、あまり問題視されない夜泣きが、どうして日本では問題になるのでしょうか？」²⁾という一節がある。

しかし、実際は外国では問題視されていないということはなく、行動学的な側面から育児中の家族に対する“睡眠問題”の解決を目的としたマニュアル本や、子供の睡眠問題に親の睡眠に関する障害や親の幼児経験が関与していることを指摘し、育児に様々な影響を及ぼす親自身の幼児経験を再考することを奨めるものなど、How to ものの著書はいくつも出版されている。

ところが、「問題視されている」はずの日本で、How to 本はおろか、それらの夜泣きに関する海外の著書の翻訳書さえ 1 冊も出版されていないのである。

そのことは、育児に関する社会的意識として、日本の母親達には夜泣き対処マニュアルやその翻訳書の普及を渴望させることも許さず、“母は強し…夜泣きなど母性で対処し、根性で耐えろ”と言う潜在的意識が働いていたことは考えられないだろうか。

育児において、一般の人々の意見やマスコミの報道等により頻繁に耳にする「いまどきの母親は」、「母性がない」、「親として失格」、「家庭のことは女が世話するもの」等の声は、頻繁に聞かされる割には、育児や家庭の問題を何の解決にも誘ってくれるものではない。育児に悩める母親は、その個人的な心の叫びまでも内に秘めなくてはなら

なくなり、そのように「秘める」ことが母親における美談と化しているようにも思われることがある。

また、中田により、インタビュー調査から「良い母親(good mother)」、「悪い母親(bad mother)」について語られることも多く、中には自分の”good mother“を強調し、同性・同立場でありながらもいわゆる”bad mother”を攻撃せしめる母親も見られたことが報告されている他、「親から、『母親』なんだからしっかりしろと言われる。夜泣きや育児の辛さは正直に声に出せないムードがある」等の意見が報告されており、このことは神話の健在ぶりが示されること、また「嫁・姑」という言葉が独特な関係性のイメージを示すように、これらを口厳しく言って歩いているのが女性に多くいることが母親達の言葉から窺われる。

社会的な側面のみならず、より心理的な側面から考察を加えれば、母性「神話」の加勢には、女性側そのものの意識が関与していることが考えられ、そこへ焦点をあてる必要があるようにも思われる。

日本社会における母性観に関する研究は様々なされているが、正高(1999)によると、“母性原理が強い日本”と言われるものの、そもそもそれも欧米の波をまともに被って劇的に変化を遂げた後のことであり、日本の育児の「伝統」とまで言い切るには疑問があるとされ、むしろ古くにあった日本の育児の伝統が崩され、母性の影響が肥大化したのではないかという解釈が述べられている³⁾。

日本の母性観の探究は非常に奥深く難しいものに思われる。

しかしながら、育児に関する神話や、社会的規範、性的な役割意識等の世間一般の通念に縛られず、紋切り型の育児スタイルではなく、母親達が自分自身において納得できる、個人に合った役割と育児を存分に行っていくるために、今後、筆者の立場からできることを論考して行きたい。

文献：1) 大日向雅美「母性愛神話の罫」日本評論社 2000., 2) <http://www.oyako.net/mypages/ikujii-yonaki.html>, 3) 正高信男「育児と日本人」岩波書店 1999